

大井川上流域における言語変化 —30年前の調査結果との比較から—

木川 行央

要旨

大井川上流域でおよそ30年前に実施された言語地理学的調査の追跡調査を2012年実施した。その結果、共通語化という全国にみられる大きな変化がこの地域にも認められた。中には30年前には広い分布域を持っていたものが、現在ではほぼ消滅しかけているものもある。しかし、その一方で30年前とその分布域があまり変化していない方言形もみられる。また、わずかではあるが、分布域が広がっている語も認められた。方言形が広く残っている語は、さらに下流の地域に分布しているものが多いと考えられる。

キーワード：言語地図、言語変化、大井川上流、分布域

1. はじめに

大井川流域・安倍川流域および旧志太郡における言語の地理的分布については、木川（1997～2006）、木川（2002）で報告をした。これらの論考で用いたデータは、静岡大学方言研究会が1974年から1976年にかけて実施した安倍川流域の言語地理学的調査、および同研究会が1977年から1983年にかけて実施した大井川流域および旧志太郡における言語地理学的調査（以下これらを合わせて静大調査とよぶ）によるものである。この調査からすでに30年以上が経過している。この30年の間の言語の変化を見る調査として、2004年に本川根町（現川根本町）小長井において多人数調査を行った。これは、静大調査の項目を中心に、本川根町出身者・町外出身者を問わずに調査したもので、生年が1910年から1990年までの68名の方に対して実施した。また、この調査と同時に、ほぼ同一の調査項目で本川根町全域を学区とする本川根学校全生徒を対象とした調査を実施した（以下これらを合わせて小長井調査とよぶ）。この

図1 調査地域



小長井調査の結果については木川(2006)で報告している。この調査では、比較の対象として、本川根町の北に隣接する静岡市井川（現静岡市葵区井川）においても中学生を対象とした調査を行ったが、静大調査のような地理的分布を見るものではなく世代差を中心とする社会言語学的な調査であった。そこで今回、静大調査と同じ言語地理学的な調査を、約30年後の2012年、川根本町において行った。本稿ではこの調査結果の一部を報告する。なお、語の分布域の点では旧町の境界付近に等語線が引かれるものもあるため、分布の説明においては旧町名（本川根町および中川根町）を用いる。

2. 調査の概要

調査は2012年8月に川根本町において実施した（図1）。調査協力者は、70歳代を中心とした70歳以上の生え抜きの方で、性別は全員男性であった。調査地点数は、静大調査では34地点であったが（本川根町19地点、中川根町15地点）、今回の調査でも静大調査と同じ集落を調査地点とした。ただし該当者のいなかった本川根町の2地点（大間・池ノ谷）は除いたので、調査地点数は32地点となる。

静岡大学方言研究会の調査では、先に行われた安倍川流域の調査に用いられた調査票が、大井川の調査では増補された。今回の調査は、この大井川調査の調査項目の中から、同調査で地点差が顕著であったものを中心に、語彙・文法・音声項目を選んだ。調査者は、筆者の外、椋山女学園大学太田有多子、國學院大學久野マリ子、國學院大學大学院竹内はるか・坂本薫・中村明裕・程田直之、同文学部進藤沙羅、首都大学東京都市教養学部伊藤冨・市原博晃・森帆菜実である。

本稿では、調査項目の中から安倍川調査でも調査された項目を中心に、方言形の分布域について30年間の変化の傾向をみていく。

3. 分布域に変化なし

今回の調査の結果と30年前の静大調査の結果を比較すると、現代の方言変化として想定されるパターンがやはりあらわれている。すなわち、一つは、方言形の分布域にほとんど差が無いもの、二つ目として、以前見られた方言形が無くなりつつあるもの、そして方言形の回答が増加しているものである。以下それぞれのパターンごとに例をあげ、小長井調査の結果とも比較しながら見ていく。

まず、方言形の分布域にほとんど変化が見られないものの例としては、「ものもらい」をあらわすメコンジキがある（静大調査の結果は図2。以下の図はすべて静大調査の結果）。この語は静大調査では、今回の調査地域の中では最も上流の海久保から最も下流の地名までの33地点で用いられ（残る1地点はメコジキという撥音の入らない形）、全域で用いられていた語と言える。今回の調査でもこの語形の回答を得た地点は29地点（この地点数には現在使用するという回答と昔使っていたという回答を含む。以下同様）とやや減少しているがやはり海久保から地名までの全域に現れた（残りの地点はモノモライないし無回答）。静大調査ではこのほかに、前の要素と後ろの要素を逆にしたコンジキメ（コジキメ）という語形も10地点にみられた。ところが、こちらの語は今回の調査では回答された地点が1地点もない。このコンジキメは静大調査でもこの語形単独での回答はなく、すべてメコンジキ（メコジキ）との併用である。おそらく静大調査の時点でも、強い勢力を持っているとは言い難く、下流域にも広く分布するメコンジキのみが残ったのであろう。なお、今回の調査でモノモライとメコンジキの両形を回答した地点の中には、メコンジキの方を多く使うという地点もあり、メコンジキを余り使わないとする地点は少なかった。小長井調査においても、1960年代生まれの協力者にまでメコンジキが回答されている。ただし、中学生においてはわずかになり、ほとんどがモノモライとなっている。現在はまだ勢力を持っているが、使われなくなる可能性が高い語であると考えられる。

図2 ものもらい

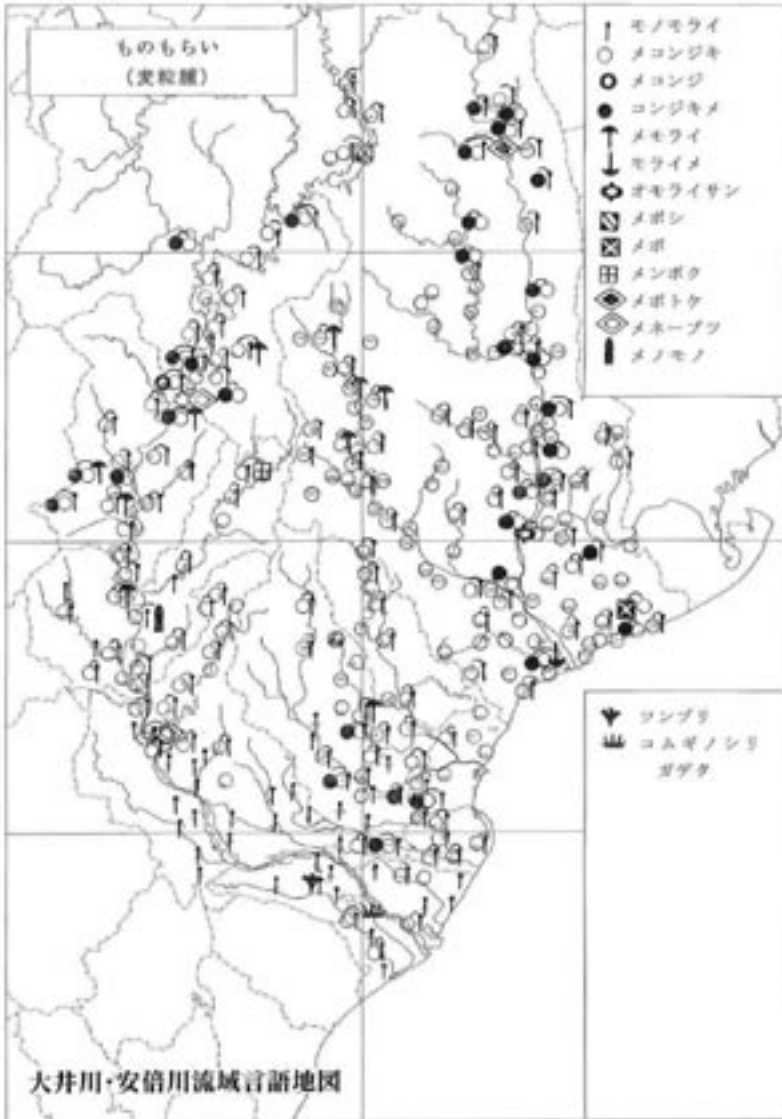
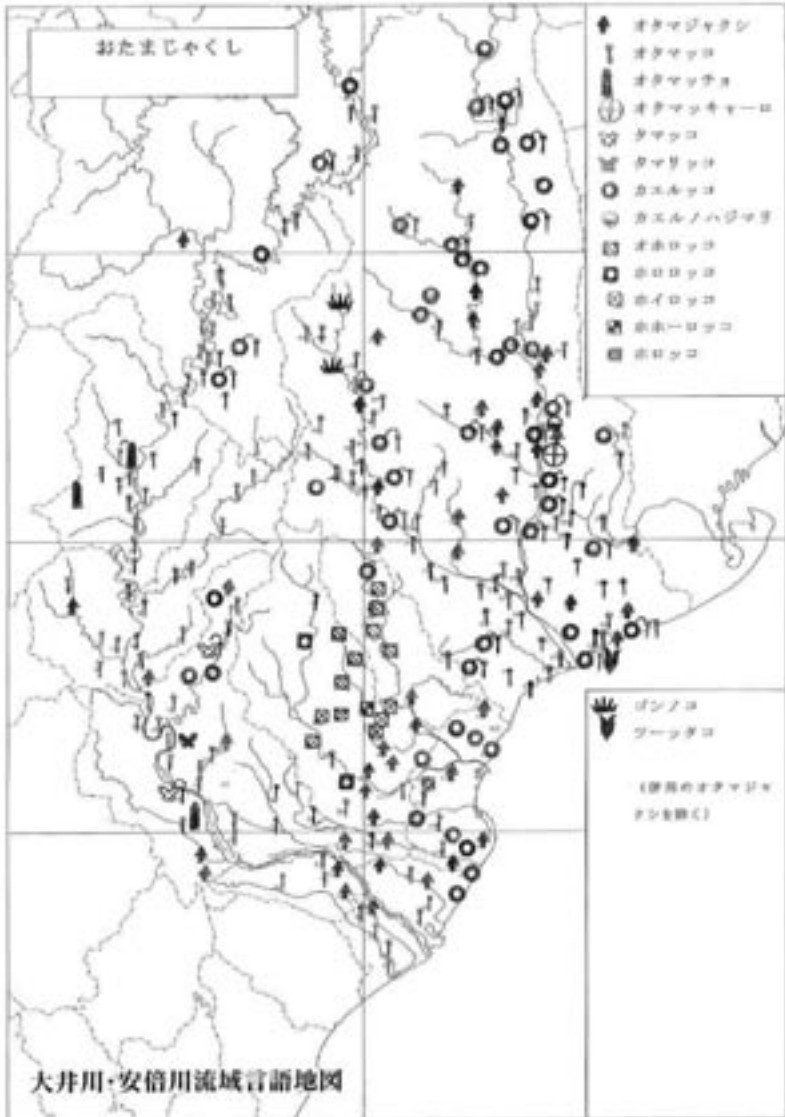


図3 みみず



図4 おたまじゃくし



「みみず」をあらわすメメズ・メメンズもその分布域に大きな変化がない(図3)。静大調査では34地点の内、1地点がメメンズのみで回答で、それ以外の33地点ではメメズ、さらに33地点の内8地点はメメズとメメンズの併用の回答であった。今回の調査でも32地点の内メメズは28地点で、そのうち4地点がメメンズとの併用、残り4地点でもメメンズが回答され、全域メメズ・メメンズであるというのは変化がないといって良い。また、静大調査ではメメンズは本川根町に集中して分布していたが、この点も同様(若干上流域に集中しているが)である。さらに、ミミズとメメズ・メメンズでは後者の方がよく使うとした地点もある。

このほか、「しおからい」のションバイも32地点から26地点と地点数は減少しているが上流域から最南の地点まで広く分布し、ショッパイやシオカライと比べるとションバイの方を多く使うという回答も多い。「(塩味が)うすい」のアマイも地点数では22地点と変化がない。「おおぼこ」をあらわすオンバコ・オンバッコも同様の状況である。

「おたまじゃくし」(図4)をあらわすオタマッコも、31地点から24地点と減少しているが、分布域は最上流から地名までと広い。ただし、昔使った語形であるという回答が多く、上記「ものもらい」や「みみず」とは若干様相が異なる。しかし、小長井調査では、回答者数は少ないが、幅広い世代で用いられ、中学生でも使用するあるいは知っているという生徒の数が一定程度見られる(協力者74名の内14名)。さらに、中学生にはオタマという語形がオタマッコと同程度に見られる(74名中16名)。しかし、この語形は、静大調査では本川根町・中川根町では1地点(梅地)のみで回答があり、下流の地域を含めてももう1地点(島田市)にみられるのみである。今回の調査でも現れなかった語形であり、新たに広まりつつある語形なのか、子供の時期にのみ用いられる語形なのか、その実態は現在のところ不明である。さらに、回答の地点数の減少はさほどではないが、昔使ったあるいは、少ないという回答が多くなっている語形には「こおろぎ」をあらわすカンナッコがある。

4. 分布域が縮小

方言形の分布域が縮小したものは多く見られる。その中には全域でほぼ用い

図5 まむし

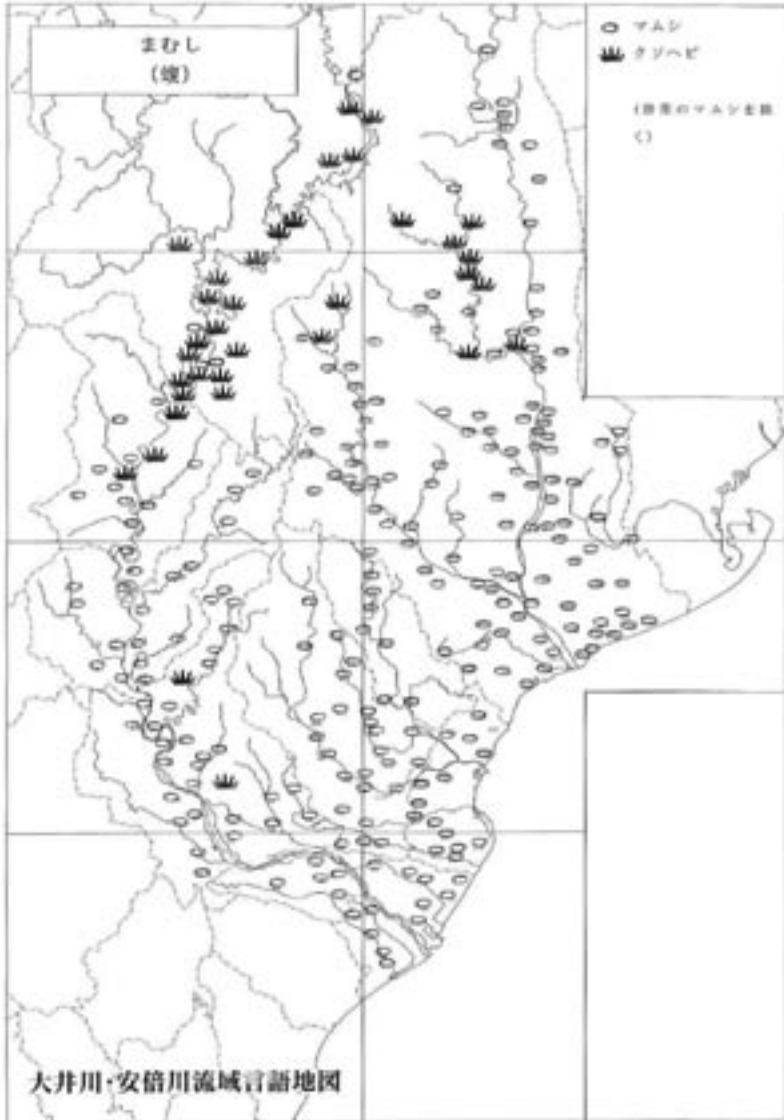


図6 とかげ



られなくなったものも多い。たとえば、「まむし」(図5)をあらわすクソヘビは、静大調査では19地点での回答があったが、今回の調査では、2地点のみになっている。小長井調査でも生え抜きでは1927年生まれの女性の一人のみが回答し、それ以外はこの語形を知らないということであった。中学生も1名が知っているという回答したが、それ以外は知らないということである。ほぼ消滅した語形ということが出来よう。

「竹馬」をあらわす語形は、静大調査では、タケウマのほか、タカアシ・タケアシ・アシダ・アシタカ等の語が見られた。しかし、今回の調査では、タカアシが2地点で見られたほかは、アシダを聞いたことがあるという回答が2地点あるのみで、全域ほぼタケウマのみになっている。

「とかげ」(図6)をあらわす語形も、静大調査では、トカゲおよび促音が入ったトッカゲのほか、語末がーゴとなるトッカゴ類(トッカゴ・トカゴ・トツカンゴ・トッカゴーを含む)が13地点、ーギとなるトカギ類(トカギ・トツカギ)が12地点に見られた。ちなみにトッカゴ類は旧本川根町に、トッカギは旧中川根町を中心に分布している。さらに1地点(本川根町平栗)で大井川・安倍川両川の下流に広く分布するヘービバンバーがみられた。これに対し今回の調査では、トッカギ・ヘービバンバーの回答はなく、トッカゴも上流域の3地点(犬間・大沢・田代)のみになっている。トッカゲについては今回の調査でも20地点で使用すると回答を得ている。しかし小長井調査では、1930年代生まれまでにしか見られず、中学生でも全員が使用しないとしている。

これらの他にも、分布域が縮小し、使用すると回答が非常に少なくなった語形は多くある。たとえば、「かたつむり」(図7)をあらわすカサンドーは、静大調査では本川根町を中心に13地点で回答されたが、今回の調査では、本川根町で最も上流の2地点のみであった。一方同じ「かたつむり」をあらわすマイマイは、静大調査では大井川下流域に広く分布しており、本川根町と中川根町だけでも21地点でこの語形の回答が得られている。今回の調査では地点数は15地点に減少しているが、カサンドーに比べると多く回答されていると言える。これは、下流域での分布の広さが影響しているものと考えられる。ただし、静大調査ではマイマイの他にマイマイドー・マイマイジという語形が見られたが、これらは回答されておらず、同系統の語でもそのバリエーションは

図7 かたつむり

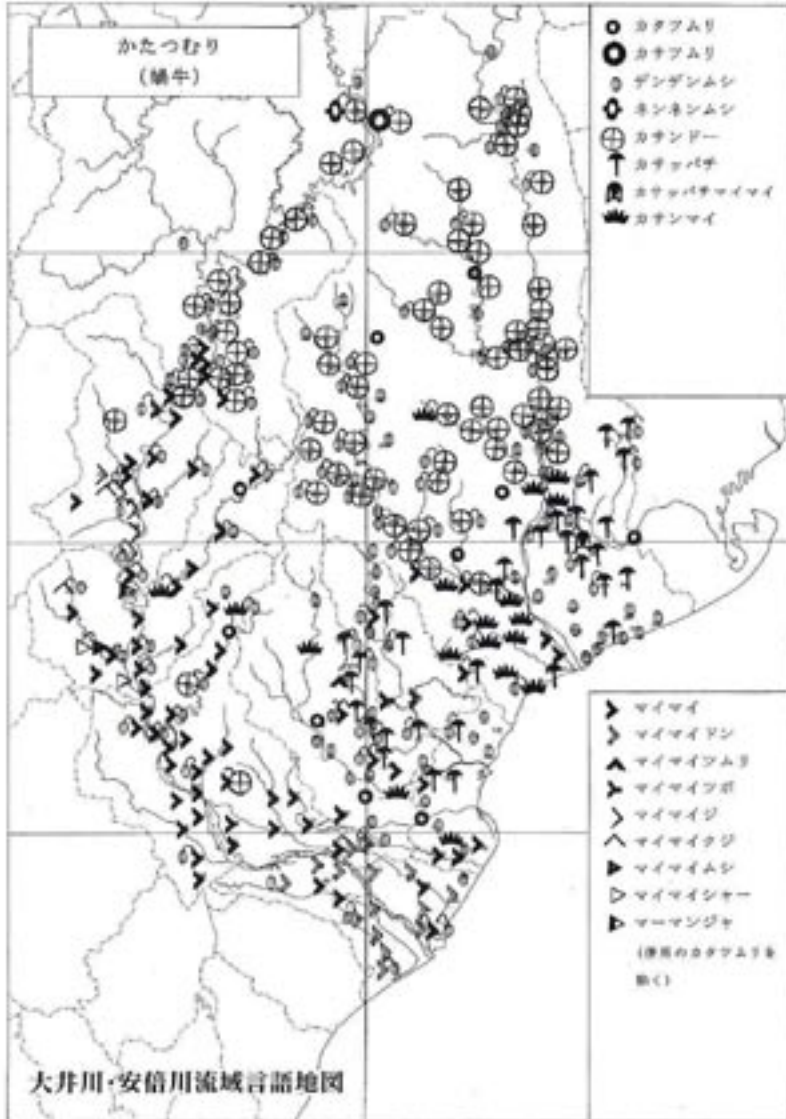
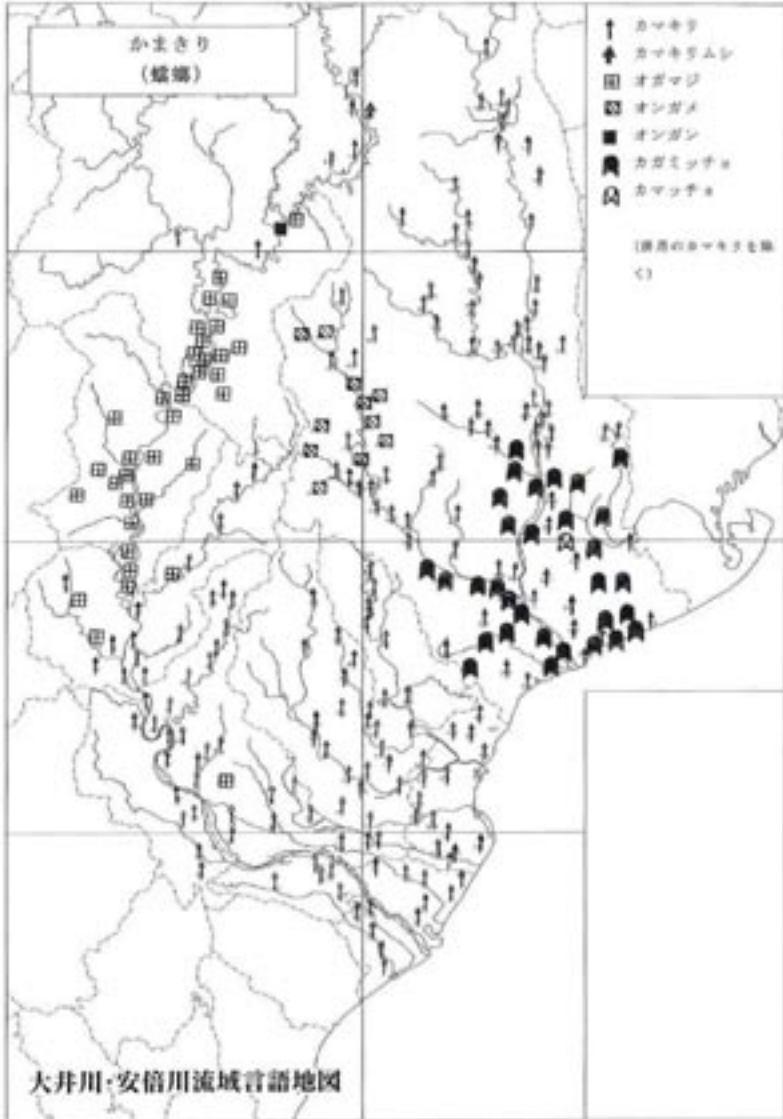


図8 かまきり



減少している。このカサンドーと同様、回答が得られた地点が、上流に偏るものとして、「こおろぎ」をあらわすカンナッチョ、「とかげ」をあらわすトッカゴ、「かぼちゃ」をあらわすカブチャなどがある。

これに対し、「かまきり」(図8。なお、本図ではオガマジ類とオマガジ類はまとめてある)をあらわすオガマジ(オガマンジ・オガマンジヨを含む)の分布域は、本川根町・中川根町全域に分布しているが、静大調査では18地点で回答があったものが、今回の調査では5地点に減少し、オガマンジヨの回答はなくなっている。さらにオマガジ(オマガンジ・オマガジャ・オマガンジヨを含む)は20地点回答があったものが1地点(尾呂久保)だけとなり、語形もオマガジのみとなっている。同様に「じゃがいも」をあらわすジャガタラは、静大調査では本川根町・中川根町全域に分布し、回答のあった地点も28地点であったが、今回の調査では、分布域こそ全域にわたるが地点数は13地点に減少している。

5. 分布域が拡大

上に見たように、分布域はさほど変わりがなくとも回答数が減る、あるいは方言形の回答がなくなるという変化は多く見られる変化であるが、方言形の回答が増加しているものも、わずかながら、ある。その一つが「じゃがいも」(図9)をあらわすジャンガーである。図でわかるように、静大調査では、大井川下流域の数地点で得られているほか、本川根町・中川根町でも2地点で回答があった。ただし、この2地点で得られたのはジャンガーではなく、ジャッガーである。大井川上流域では撥音が促音になるという現象があるところがあるので、図9ではまとめてある(ただし、下流域に分布するジャンガーと地域的に離れているので、別個に生まれたものかもしれない)。今回の調査では、ジャッガーではなくジャンガーが7地点で回答されている(静大調査ではジャッガーの2地点のうち、1地点は本川根町の青部であったが、今回の調査では全て中川根町)。大井川下流域に分布していたジャンガーが、若干北上したとも見える。同様に回答地点が増加した語に「さつまいも」のサツツーがある。静大調査ではこの語は大井川流域全体の中で中川根町の1地点のみで回答されていたが、今回の調査では6地点で回答があった(すべて、中川根町)。これらの

語がさらに下流の地域において新たに勢力を得つつあるのか、今後下流域での調査の結果を得て考察を加えたい。

「イモの意味」（単にイモというと、どの芋をさすのかを問う項目）は、静大調査では全地点「さといも」であったが、今回の調査では「さつまいも」であるとする回答が4地点であった。地点数としては多くはないが、これも大井川下流域に分布するものであり、かつ小長井調査でも生え抜きでは1940年代生まれから「さつまいも」が現れ、中学生では43名（58.1%）が「いも」は「さつまいも」をさすとしており、今回の調査結果は現在への変化の一端を示すものといえよう。

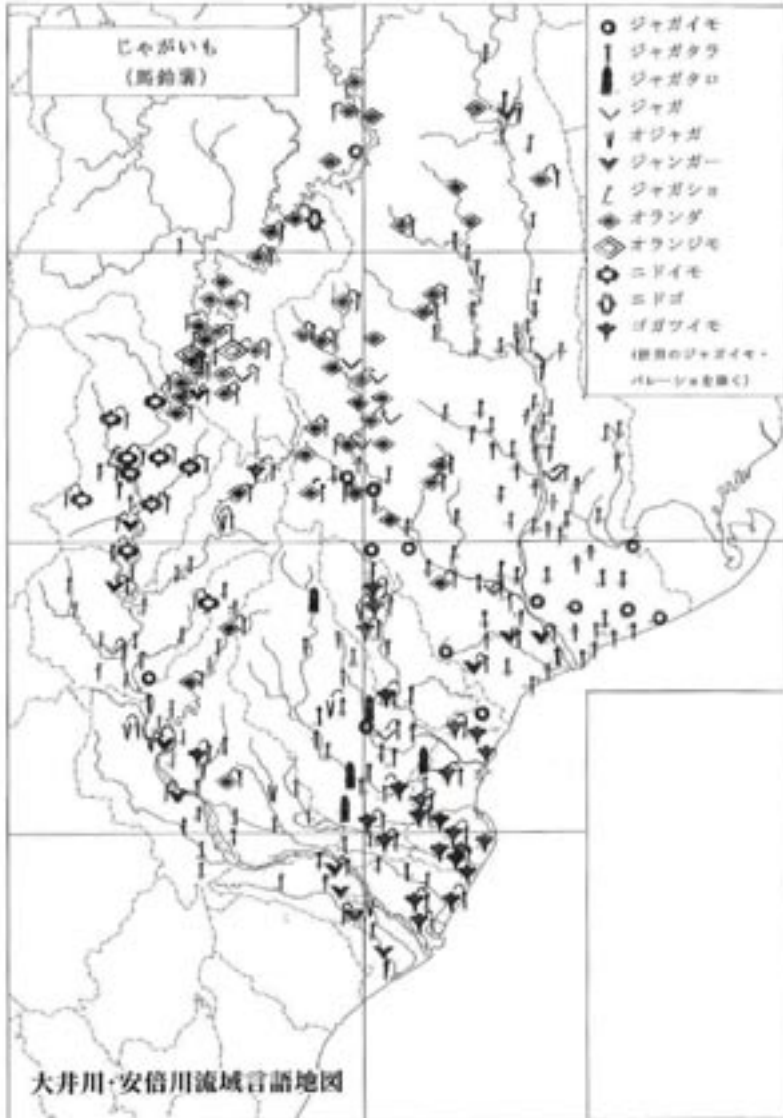
さらに、鰻釣りの餌に使う「大きなみみず」の名称として、静大調査ではガブラ類（ガブラ・ガブラドー・ガブラドージ・ガーブラ・ガーブラド・ガープラド）とカブラドー類（カブラドー・カブランド・カーブラドー）類の語が得られた。これらの語形のうち、前者は主として中川根町に、後者は主として本川根町に、分布していた。その地点数は前者が14地点、後者が16地点である。それが今回の調査では、ガブラ類が11地点、カブラドー類が13地点とそれぞれ地点数は減少しているが、前者の分布域が広がっている。すなわち、ガブラ類は静大調査の時点では、本川根町の最南の集落（青部）以南にのみ分布していたのが、今回の調査ではさらに上流の集落にまで分布域が広まり、ガブラ類11地点の内半数が本川根町である。一方カブラドー類が本川根町のみという点は変化がない。

このように、方言形の分布域が広まっているという現象はわずかであり、また地点数も多くはないが、認めることが出来る。

6. 安倍川流域から伝播したと考えられる語の変化

上記のように、30年間で分布域にほとんど変化がないもの、極端に回答数が減少あるいはほぼなくなっているもの、増加ないし分布域が拡大しているものなどいくつかの変化のパターンがみられた。そこで、どのような語がどのパターンになるのかが問題となる。この点について検討すべきであるが、今後調査地域を拡大するので、その結果と合わせて考えるべきであろう。ここでは、他地域に比して、特にこの地域に関係する可能性がある点として、どこから伝

図9 ジャがいも



播したものであるかが、変化に関与するののかについてのみ確認する。

大井川は急流であり、かつては下流と上流を結ぶ川沿いの道路も十分には整備されていなかった。そのため上流域では川沿いに下る道より山越えをして東西に接する地域との交流が多かったところも多い。特に本川根町の千頭・小長井周辺は、静岡の市街地へ山を越えていくが多かった。現在でも山を越えて静岡市へ行く道はあり、利用されているが、鉄道が大井川沿いに走っており、また、川沿いの道路も整備されている関係から下流域との結びつきが、以前に比べて強くなっている。

さて、大井川上流域に分布する語は、一般的に下流域から伝播してきたものが多いと想定されるが、上に述べたような環境であるので、大井川の下流からではなく、安倍川流域から山越えの形で入ってきたと考えられる語もあると考えられる。木川（1997～2006）や木川（2002）では、たとえば、「竹馬」のアシダや「とうもろこし」のモロコシ、「蝶」のカーブリがそれぞれであり、さらに「かたつむり」のカサンドーや「ものもらい」のコンジキメ、「とかげ」のトツカゴの類、「まぶしい」のヒドロシーもその可能性があったとした。このうち、モロコシは静大調査11地点に対し9地点と大きく減少はしておらず、また分布も本川根町中心というのも変化がない。ヒドロシーも9地点から5地点へ減少しているが、本川根町中心という分布域に変化はない。しかし、その他の語は、いずれも勢力が弱まっており、特にアシダに関しては聞いたことがあるという情報を、2地点で得たのみ、カーブリは最上流の1地点（海久保）でチョッチョカーブリという語形を得たのみである。上でも見てきたように、下流域に広く分布している語の場合、比較的その勢力を残しやすいという傾向は見られる。モロコシやヒドロシーは例外的といえるが、モロコシはトーモロコシあるいはトンモロコシとの、またヒドロシーは本川根町のヒデラシー、中川根町に分布するヒズラシーとの形態上の類似が影響を与えている可能性も考えられる。

従って、特に理由がない限り、大井川の下流域に分布せず、安倍川流域に広く分布する語は、以前の分布域が限られていることもあり、用いられなくなる傾向にあるといえよう。

7. 「ひきがえる」をあらわす語の変化

ここで、上で見てきた変化を、1枚の地図の中で確認してみよう。ここでは「ひきがえる」(図10)を取り上げる。

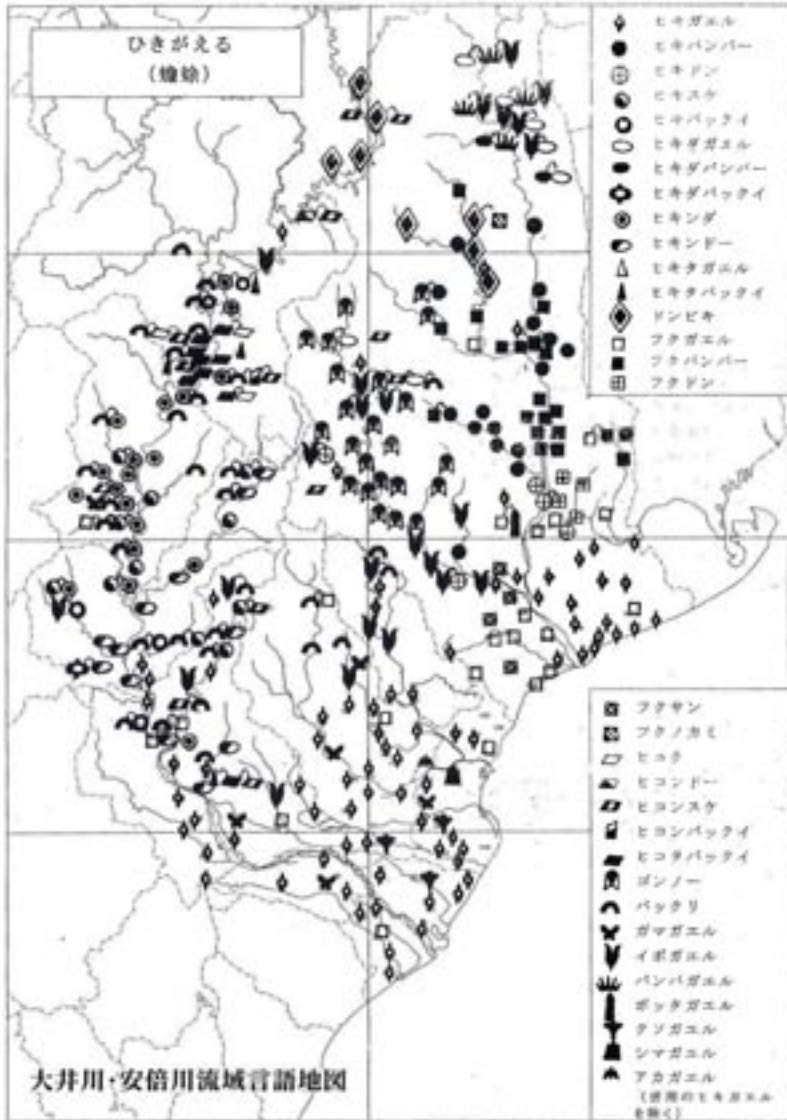
この項目の静大調査での結果は、安倍川流域・大井川流域ともに非常に多くの語形が現れ、その歴史の再構も困難である。詳細は木川(2004)にゆずるとして、本川根町と中川根町における分布のみをまとめると、共通語と同じヒキガエルおよび最終拍の母音が/o/と交替したヒキガエロの他に、まずヒキンダ(ヒキッダ・ヒキッダーを含む)が全域にあり(16地点)、さらに後ろにースケのくる語(ヒコンスケ・ヒコスケ・ヒキンスケ・ヒキスケ。前がヒコーの形は本川根町に、ヒキーの形は中川根町に多い)、バックイ・バックリ(前者は本川根町中心、後者は中川根町)の類などが用いられる。ヒキンダ類の語・ースケが語末に来る語は安倍川流域にも見られるが、バックイ・バックリは安倍川流域にはほとんど見られない語形である(藁科川流域の1地点のみ)。バックイとバックリは、分布域の違いの他に、バックイはヒキタバックイやヒクタバックイなど複合語を作ることがあるのに対し、バックリは前後に他の形式が接続することがないという違いがある。

さて、今回の調査の結果であるが、全体的な傾向として、静大調査で確認された語形で今回回答のなかった語が多いということ、そして似た語のバリエーションが非常に少なく、静大調査で見られたような多くの語形が現れないという点である。

まず、今回回答数が減少した語形としてはヒキンダ類とースケが語末にくる形があり、前者は16地点から5地点に、後者は9地点から1地点になっている。さらにヒコタバックイやヒコンスケなど語頭がヒコーの形は10地点から2地点に、ヒクタバックイも2地点から0地点になっている。

これら使用が減少した語形に対し、バックイ・バックリは様相が異なる。まずバックイは、静大調査で17地点で用いられていたが、今回の調査では19地点に増えている(この数は複合語となったもの、バックイ単独で回答されたものを含む。さらに、バックイとヒコタバックイなど1地点で複数の回答があった場合も、地点数は1地点としてある)。静大調査と異なるのは、同調査ではヒキバックイ・ヒキタバックイ・ヒキンバックイ・ヒコタバックイ・ヒコタン

図10 ひきがえる



バックイ・ヒクタバックイ・ヒコンバックイと様々な形があらわれたが、今回の調査では、ヒクタバックイのみであるという点である。一方、バックリも5地点から12地点に増加している。ただし、バックイが本川根町、バックリが中川根町を中心とするという点は変化がない。また、中川根町内でバックイを回答した2地点（徳山・壺町河内）は、今回の調査でもバックイが回答されている。

以上のように、「ひきがえる」をあらわす語には、使用が減少した語、分布域がほとんど変わらず回答の地点数が増加した語などがあり、これまで見てきた変化のパターンがそれぞれ現れていることになる。

8. まとめ

以上、2012年に実施した大井川上流域で実施した言語地理学的調査の結果の一端を報告した。その結果、静大調査ではみられたが、今回の調査では使用するという地点が減少した語が多数あった。それに置き換わるのは多くの場合、共通語である。しかし、その一方、地点数は減少しても方言形の分布域に大きな変化がないものも多い。ただし、わずかながら分布域が拡大、あるいは使用するとする地点数が増加している語もある。どのような特徴を持つ語がそれぞれの変化をたどるのか、今回取り上げなかった項目さらに調査地域を広げることにより考えていきたい。

謝辞 本研究は、平成22年度科学研究費基盤研究A「方言分布変化の詳細解明—変動実態の把握と理論の検証・構築—」（研究代表者 大西拓一郎）による研究成果の一部である。

参考文献

- 木川行央1997～2006「大井川・安倍川流域方言の言語地理学的研究（1）～（7）」『静岡・ことばの世界』第1号～第7号
- 木川行央2004「大井川・安倍川流域方言の言語地理学的研究（4）」『静岡・ことばの世界』第4号

言語科学研究第19号（2013年）

木川行央2002 「方言分布から見た大井川・安倍川流域－大井川・安倍川流域言語地図から－」『神田外語大学言語科学研究センター紀要』第1号

木川行央2006 『静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書（課題番号15520293）

国立国語研究所1966～1974 『日本言語地図』大蔵省印刷局

中條修編1982 『静岡方言の研究』吉見書店